

鶴屋南北の世界

小池章太郎著

鶴屋南北の世界

小池章太郎著



三樹書房

著者略歴

昭和10年（1935）、浜松市に生まる。
昭和29年（1954）、劇団前進座演劇映画
研究所に入所、現在同座企画制作部勤務。
近松・南北作品など歌舞伎劇の改訂・補綴にたずさわる。

主著——『口訳手前味噌』（角川選書）、
『考証江戸歌舞伎』（三樹書房）ほか
『江戸砂子』（東京堂出版）『鶴屋南北
全集』（三一書房）『三遊亭円朝全集』（
角川書店）、などの翻刻校訂・語註書、
演劇評論がある。

現住所——所沢市中新井5-1 泉ハ
イツ3-204。



鶴屋南北の世界

昭和五十六年三月二十一日発行

定価 三、二〇〇円

著者 小池章太郎

発行者 小林美喜治

発行所 三樹書房

東京都千代田区神田神保町一三〇
電話東京 〇三一二九五—五三九八

印刷所 常悦印刷株式会社

製本所 有限会社明昌印刷

製函所 株式会社積信堂

高田紙器印刷工業所

落丁・乱丁本はお取替えします。



「お染久松色説販」 お染(玉三郎) 梅村豊撮影



「絵本合法衛」 うんざりお松(国太郎) 太平次(梅之助) 梅村豊振



「東海道四谷怪談」 お岩(国太郎) 中林勝昭撮影



「盟三五大切」 小万(玉三郎)源五兵衛(孝夫) 梅村豊撮影

はしき

南北もまた歪んで生み落された。

世は泰平に倦みはて、地殻は静かに移りゆき、つぎに来る時代の準備をはじめていた。歴史の断層に生じた大きな亀裂を、時代の子南北は覗き見てしまった。死臭の漂うなかに彼の見たものは、人間の変貌した諸相であった。非行化し男性化した女（悪婆）、怨霊、妖怪、世界転覆をはかる巨悪の権化、鬼畜のごとき殺人者、近親相姦、めまぐるしく変身をとげる俳優たち、写実な殺人美学、笑いをともなうて出没する棺桶と墓場のイメージ……それらのもろもろを醜惡に、怪奇に、また美しく、簡素な江戸の舞台の上に、白昼夢さながらに南北は彩って見せた。度はずれた細密さと、度はずれた誇張がそこには同居し、愁嘆と哄笑、葬礼と婚礼とがごたまぜに渦巻く世界であった。十九世紀の初頭に、日本では西欧にふれることなく、いわゆる「世紀末」の芸術を先どりしてしまった、といっても過言ではあるまい。

いま、二十世紀の終末期にさしかかりつつあるとき、私たちにとって鶴屋南北の作品はいかなる意味を持つてくるのだろうか。歴史はくり返さないが、くり返すとすれば、一度めには悲劇の面貌で、二度めには喜劇としてたち現われる、という古人のことばもあるが、反逆と変節の「悪」の季節は、いま復活のさなかにある。

「英雄を必要とする時代は、不幸な時代だ」というセリフが、ブレヒトの芝居にあった

が、南北復活をとりまく私たちの状況は、むしろ「アンチ・ヒーロー」を必要とする時代は、さらに不幸だ」といふべきだろう。

ここ数年らい、南北劇のいくつかを実際の舞台で補訂上演してきたが、南北という作者をトータルな意味で把握する道程において、まだそのトバ口を手きぐりしている現況である。演出家として共同作業にたずさわる畏友高瀬精一郎氏とともに、一人の江戸都市貧民の眼に映じたこの世の光と影を見きわめてゆく仕事は、今後も当分続けたいと思う。本書はその途次におけるメモランダム^①の提出といった性質の、些少な報告にすぎない。

第三章の鑑賞案内は、昭和五十五年一月―十二月の「演劇界」に連載したものに若干筆を入れて再録した。同誌の藤田洋氏に御厚礼申し上げる。

また第二章の未翻刻合巻『^{東街道}門出魁名残花四家怪譚』は、四谷怪談の上演資料としても価値の高いもので、本書を御貸与下さり翻印を御快諾下さった向井信夫先生のいつもながらの御厚情に感謝の意を表する。

資料の面では梅村豊氏、中野英伴氏、中林勝昭氏、中山幹雄氏、林美一先生、演劇界編集部、早大演劇博物館の御協力を仰いだ。なお服部幸雄・岩田秀行の両氏にも何かと御厄介をかけ、御垂教を賜わった。本書発刊までに、三樹書房社主小林美喜治氏、同社編集長尾田誠一氏、宮川典子氏には、原稿の大幅な遅延から迷惑のかけ通しであったにもかかわらず、前者にとらぬお世話になった。記して深謝のことばに代える。

辛酉歳首

著者

目次

口 絵

はしがき.....五

I 南北への序論.....一一

——『東海道四谷怪談』の初演をめぐって——

II 東^と街^{かい}道^{だう}門^{かど}出^で魁^き 名^な残^{ごり}花^{のは}四^{よつ}家^{やく}怪^{かい}譚^{だん}（翻^{へん}刻^{こく}）.....三三

III 鑑賞案内.....八一

1 天竺^{てんじく}徳^{とく}兵衛^{へいゑ}韓^{かん}嘶^し.....八三

2 時^{とき}枯^{もき}梗^{きやう}出^{しゅつ}世^せ請^{うけ}状^{じやう}.....九三

3 心^{こころ}謎^{なぞ}解^{とけた}色^{いろ}糸^{いと}.....一〇三

12	盟 かみかけてさん 三五大切 ごたいせつ	一九五
11	浮世柄比翼稻妻 うきよづかひよくのいなづま	一八五
10	靈驗 れいげん 龜山 かめやま 銚子 ぼこ	一七五
9	櫻姫 さくらひめ 東文 あづまぶん 章 しょう	一六五
8	杜若 かきつばた 艷色 いろもえど 紫 ぞめ	一五五
7	お染久松 そめひさまつうき 色読販 いろよみうり	一四三
6	解脫 げだつ 衣 きぬ 楓 もみじ 累 かさね	一三三
5	繪本 えほん 合法 がっぽう 衢 がっし	一二三
4	勝相撲 かちずもう 浮名 うきな 花触 はなふれ	一一三

I 南北への序論

南北への序論

『東海道四谷怪談』の初演をめぐって

『東海道四谷怪談』の初演は、文政八年七月の中村座、作者南北は七十一歳であった。三世尾上菊五郎が文政九年に上坂するについて、お名残狂言として一番目に『仮名手本忠臣蔵』を演じ、本作はその二番目狂言として書き卸された。

この上演はかなりの好評をもって迎えられ、古今稀れな大入りとなり、九月半ばまで打ち通しての上演となった。

本作は、南北がさまざまな江戸の巷説をつきまぜて、新しい怪異譚に仕立てあげたものだが、その素材となった原話は、河竹繁俊氏（岩波文庫版解説）によると、つぎのごとくである。

一、四谷左門町に住んでいた御先手同心、田宮又左衛門伊織の娘お岩が、婿の伊右衛門と媒妁人秋山長左衛門とにだまされて、嫉妬のために身を果たし、怨霊となって良人、縁者を悩ましたという、元禄以来の伝説。

二、初代尾上松助の弟子といわれる木幡小平次に関する伝説。

三、享保年間、深川万年町の医師、中嶋隆碩の僕で、主人殺しの上、権兵衛と変名して、搦米屋の下男となっていた直助という男と、日本橋通一丁目の田中近江の下男で、同じく主殺しの権兵衛という男二人が、同年、同



お岩（六世梅幸）

月、同日に鈴ヶ森で処刑された事件。

四、当時、山の手辺に住む、ある旗本の妾が、中間と通じて露見し、男女は一枚の戸板に釘づけにされ、なぶり殺しにされて、神田川へ流された話。

五、砂村の隠亡堀に、固く身体を結び合った心中者の死骸が流れ着き、それを鰻かきが発見して、大騒ぎになった話。

河竹氏は右の五つを列挙し、「これら、市井に伝えられた伝説、実話を中心として、彼の旧作（『彩入御伽草子』『阿

国御前化粧鏡』『法懸松成田利剣』『謎帯一寸徳兵衛』などの諸作を指す——引用者）のあるものを按配しながら、四谷

怪談は構成されている」との見解を述べている。

(一)の実説については、三田村鳶魚氏の「四谷怪談の虚実」（全集第十八巻所収）や、綿谷雪氏の『川柳妖異譚』などに詳しいので繰返さないが、この巻説はかなり古くから「四谷雑談」として実録本によって流布していたものらしい。

ここで実説における人名と、劇中の役名とを比較しておきたい。

劇中の「四谷左門」は実説の「田宮伊織」。「お岩」は同じく「お岩」だが、「民谷伊右衛門」は「田宮伊左衛門」。「伊藤喜兵衛」は同じく「伊藤喜兵衛」で、実説では田宮の上役にあたる。「秋山長兵衛」は「秋山長左衛門」で、実説では田宮の同役。喜兵衛の孫娘「お梅」は、その妾「おこと」……となっている。

これら実説（実録）の人名が、初演時の役名にかかわって重要な意味を持つことになるが、それはまたのちに述べよう。

初演の上演方法は、つぎのような構成であった。

初日——一番目『仮名手本忠臣蔵』大序／六段目、二番目『東海道四谷怪談』序幕／三幕目（隠亡堀）まで。

後日——一番目『仮名手本忠臣蔵』七段目／十段目、二番目『東海道四谷怪談』四幕目／大詰、さらに『忠臣蔵』十一段目討入の場。

この上演形態は、次章掲出の草双紙『東海道名残花四家怪譚』の序文に、「初日は後日よりも人の山をなし。後日は初日の日取を違へて。二日見物せざれば。趣向のつじつま全からず……」と記されていることから、かなり意識的にモンタージュを狙っての構成であると諒解される。

ところが、河竹繁俊氏は、『隠亡堀両日上演説』、すなわち後日の二番目にも第三幕隠亡堀の場がくり返し上演されたとする説を唱え、今日それがほぼ定説化している。これについて筆者は疑問を投げかけてきたが、その経過を、三一書房版『鶴屋南北全集・第十一巻』解説（藤尾真一氏）から引用によって以下に掲げる。

……上演方法で、従来問題とされているのは、三幕目の「隠亡堀」を、両日ともに上演したかということである。

『花江都歌舞妓年代記続編』に「尾上菊五郎筑紫大宰府へ

参詣に付名残狂言二日替り初日は忠臣蔵大序より六段目迄、二番目怪談三幕、後日は忠臣蔵七段目より敵討迄、二ばん目怪談跡、まぐ三幕なり」とあって、台本どおり五幕であれば、どうしても、真中の幕を二度上演しなければならぬことになる。

この説をとっているのが、今尾哲也（『国文学』昭和四十六年九月号「作品論・東海道四谷怪談」）であり、戸板康二も『名作歌舞伎全集』の解説で、二回上演としている。

河竹繁俊は、『日本文学大成』第三十六巻『鶴屋南北集』（昭和二十三年刊）の解説では、「後日には忠臣蔵の七段目から討入までと、本作の四、五幕とを上演したのであった」としているが、昭和三十一年八月刊の岩波文庫『東海道四谷怪談』の解説では、「第二日目には七段目以下と、この作の三、四、五幕とを出し、終りに忠臣蔵の討入を置いたのであった。四谷怪談の三幕（隠亡堀）は、両日ともに演じられたようである」としている。

最近、小池章太郎が、「雁—映像＋定型詩」創刊号（昭和四十七年一月十日発行）で、この問題を論じている。その要旨は、『歌舞妓年代記続編』の記事は、櫓下番付に拠

漫 画 二 日 目 幕 閉

